



# 高原の風だより

2019（令和元）年10月 発行 <第17号>

## 新そばなど秋の味覚を満喫

### ～第36回開田高原そば祭り～

10月はスポーツや文化祭、収穫祭など秋のイベントが目白押し。木曾町開田高原では10月6日（日）、恒例のそば祭り（観光局主催）が行われた。

今年で36回を数える伝統あるイベントで、メイン会場の木曾馬の里広場には、県内外から大勢の家族連れや観光客らが訪れ、お目当ての新そばや焼きトウモロコシ、五平餅、イワナの塩焼きなど秋の味覚を満喫していた。

会場ではハクサイやトウモロコシ、ダイコンなど新鮮な高原野菜などが販売されたほかクラフトフェアなども行われた。

ステージでは、人気のそば食い競争や地元の太鼓、中学生の吹奏楽演奏なども行われ祭りを盛り上げた。



倶楽部のメンバーと応援に駆けつけてくれた皆さん

### 県外からもボランティア

### ～愛知、神奈川、奈良、群馬などから5人～

そば祭りには県内外から新そばや新鮮な高原野菜などを求めて多くの皆さんが訪れるが、地域の高齢化によりスタッフの確保が課題になってきている。開田高原倶楽部（坂口和芳会長）では、昨年からはそば食い競争を担当するなど協力しているが、地元中学生も毎年、授業の一環で協力してくれている。そういう中で今年は、神奈川や愛知、群馬、奈良などからまちづくりの仲間が応援に駆け付けてくれた。また、県職員などもボランティアとして協力してくれた。お手伝いいただいた多くの皆さんに心より感謝したい。

### 御嶽山バックにそば食い競争

### ～男性優勝は桑名の伊藤さん 18杯～



女性の部でそば食いに挑戦する参加者

そば祭りの一番人気は、やっぱりそば食い競争。オワンに入ったそば（約50g）を3分間で何杯食べられるかを競う。子ども（小学生以下）、男性、女性、カップルの4部門があり抽選で10人（カップルは5組）が、仲間の熱い声援の中でチャレンジした。

結果は以下の通りで、いずれも県外者が優勝し賞品のかいだそばや高原野菜などを手にした。

（敬称略）

部門	名前	（出身）	杯数
子どもの部	北沢 利菜	（瀬戸市）	13杯
男性の部	伊藤 義巳	（桑名市）	18杯
女性の部	陽山 恵子	（泉大津市）	12杯
カップルの部	神谷昭範・大木智香子	（名古屋市）	9杯

## ～全国まちづくり交流会～

# 震災から8年 飯館の村づくりを見る

「東日本大震災から8年。飯館村の新しい村づくりを見る」をテーマにした全国まちづくり交流会が8月2日から3日間、福島県飯館村で行われた。交流会は全国各地で自主的、主体的にまちづくりや村おこしなどを行っている仲間が集い、情報交換を行うもので今年が17回目。全国から80人余りの仲間が集まり、木曾からは開田高原倶楽部のメンバー4人が参加した。



自ら学校施設を案内する菅野村長

初日には前夜祭で交流を深め、2日目には大型バスに分乗して村内の花卉栽培農家や公共施設などを視察。その後「飯館村の新しい村づくり」と題した菅野典雄村長の講演を聴いた。

## 放射能汚染は飯館村にも

### ～一転 計画的避難指示区域へ～



宿のカウンターに設置された線量計

福島県相馬郡飯館村は、阿武隈山系北部の高原に開けた緑豊かな美しい村で、農業や畜産などが盛んだった。2011年3月11日の東日本大震災の影響で東京電力福島第1原発の爆発、15日朝には噴出された放射性物質が風に乗って北西に運ばれ飯館村周辺地域に降り注がれた。

当初、飯館村は30kmから50km圏に位置するため一部以外は避難区域に指定されていなかった。しかし、その後放射能汚染が明るみになり4月22日、全域が計画的避難指示区域に指定され住民は村外への避難を余儀なくされた。

## 人口は震災前の4分の1以下に激減

### ～6100人の人口が1300人に～

避難しなくても良いと思っていたのに一転、全村避難。村にとっても住民にとっても「寝耳に水」で信じられないことだった。菅野村長は避難するに当たって、将来なるべく大勢の住民が帰って来られるように「車で1時間以内の避難先」を確保することにも努めた。

それから6年にも及ぶ長い全村避難を経てようやく一昨年、一部地域を除いて避難指示解除となり少しずつ住民が戻りつつある。しかし、震災前に6100人余りいた人口が、現在は1300人程に激減してしまったという。

また、180戸あった和牛農家も県内外の別の場所に移った10戸余りを除き全てが廃業した。

管内視察の際、車窓から荒れ果てたきゅう舎や山積みになされ厚いシートで覆われた除染土壌などを見るにつけ、まだまだあちこちに放射能汚染の影響が色濃く残されていることを痛感した。



厚いシートで覆われた除染土壌

管内視察の際、車窓から荒れ果てたきゅう舎や山積みになされ厚いシートで覆われた除染土壌などを見るにつけ、まだまだあちこちに放射能汚染の影響が色濃く残されていることを痛感した。

## 未来に向け新しいまちづくり ～村の真ん中に復興拠点エリア～

ただ、暗い話ばかりではなかった。2日目に視察した花卉栽培農家は、避難先でもビニールハウスを借りて花を栽培。帰村後に奥さんと二人でトルコギキョウやカーネーションなどを栽培し市場でも好評だと感慨深げに話してくれた。

村では復興・再生計画により村のほぼ真ん中を復興拠点エリアに位置づけ、道路沿いに道の駅や住宅団地、集会所、花卉栽培施設などを整備し、村民の生活再建や雇用回復を進めている。

今までの村長の苦悩や葛藤などその心痛は想像に余りあるが、それでも今、数々の苦難を乗り越えて未来に向け新しいまちづくりを力強く押し進めようとする信念のようなものが感じられた。



花卉栽培農家を視察

## 「までいライフいいたて」目指す ～金から命や心の世界へ～

「までい」。聞きなれない言葉だが飯舘村では昔から暮らしの中で使われてきた方言で「もったいない」とか「節約」「心を込めて」「念入りに」といったような意味があるという。「までいライフ」とは、スローライフよりも少し深い言葉で、地産地消や心の豊かさを目指す生き方。村の総合計画でも「までいライフいいたて」を明記して町の進むべき方向性を示している。

菅野村長は「日本社会は少しアクセルを踏みすぎてきた。アクセルを少しゆるめ、スピードをダウンする必要があると思う。走っている人は歩く、歩いている人は立ち止まる。立ち止まっている人は、しゃがんでみる。そうすると足元の花の美しさが見えてくる。変わった風景が見えてくる」と、金の世界から命や心の世界へ軸足を置く必要性を話した。



道の駅の前で菅野村長と。

## あたりまえのありがたさ

## ～日々への感謝を忘れないために～

「毎日の平凡な生活、田舎の一見変化のない暮らしが、いかに素晴らしい日常であったか気づかされた」という菅野村長。「震災に遭ったからこそ生まれた出会いや物語がある。離れたからこそ深まった故郷への思いがある。失ったからこそ気づけた『あたりまえのありがたさ』がある」と、過去に思いを馳せるだけではなく、物事を前向きにとらえている姿勢がとても印象的だった。

「までいライフ」を実践し、新しい飯舘村を築き上げていこうという中で、3月11日を「あたりまえをありがたいと思う日」に制定したという。あたりまえの日々への感謝を忘れないために。飯舘村での交流会を通じて、私たちが日々生活している何気ない平凡な日常がとても貴重でとても有り難く思えた。



村長宅の離れで見かけた額縁

<p><b>3月11日は、</b> <b>あたりまえをありがたいと思う日</b></p>	<p>恋しくて 恋しくて 泣いて そして気づいたのです あたりまえと思っていた毎日は たくさんの尊い営みや 思いやりや 愛情で 大切に つむがれていたのだと 飯舘村は昨年 3月11日を 「あたりまえをありがたいと思う日」に 制定しました あたりまえの日々への 感謝を忘れないために あたりまえの本当に意味を 未来に伝えたいから</p>
<p>気づいたのです 原爆事故の避難で あたりまえが 実はちっとも あたりまえじゃなかったこと あたたかなご飯が食べられること 畑の採れたての野菜が味わえること 家のお風呂にゆっくり浸かれること 家族と一緒に笑っていられること あの日 なくしたあたりまえが</p>	

## はりきりご長寿列伝

みうら ゆきお  
三浦 雪雄さん (94歳・王滝村) ⑭

このコーナーでは高齢にもかかわらず今なお元気に仕事をしている人、自分の趣味に専念している人など元気あふれるお年寄りを紹介しています。今回は王滝村の三浦雪雄さんです。なお、この様子は7月22日、NHK テレビのイブニング信州で放映されました。



三浦 雪雄さん

### 始めると食事が抜きになってしまう ~94歳の編み物の達人~

長年営林署の職員として山仕事に従事してきた三浦さんの趣味は「編み物」。そのキャリアは 85 年になる。7人兄弟の三浦さん、小学3年のときに「私一人では間に合わないから（編み物が）できる人は手伝いなさい」と母親に言われ編み物の基礎を教えてもらった。営林署時代は何日も山に閉じこもり、山小屋でランプ生活する日々。



テレビなど娯楽もなく退屈な中で、唯一の楽しみが編み物だった。「どんな難しいものでも1週間くらいで編んでしまう」という三浦さん。

「作ることが好きだから、始めると食事が抜きになってしまう」と笑う。柄や型など最初から決まっているわけではなく、作りながら考えていく。帽子などはかぶる人に合わせてデザインする。



器用に編み物をする三浦さん

**カラフルなデザインのマフラー** 「編み物の魅力は、なんといっても完成したときの達成感です」という三浦さん。作品は帽子やマフラー、ベスト、座布団カバー、靴下などさまざまで、最近は南木曾の「ねこ」に着想を得たベストなども手掛けている。可愛くてカラフルなデザインのマフラーは、若い女性に人気がある。また、子や孫にはたくさんのニットをプレゼントしてとても喜ばれた。

「気を長く持って短気を起こさず」が母の教え。「98 歳まで生きた母の年まで元気で編み続けたい」と笑顔が弾けた。

## 私の本棚

『気象予報士のテラさんと、ぶち猫のテル』



(志賀内泰弘著・ごま書房新社)

名古屋在住の作家・小説家の志賀内泰弘先生は、新刊が出るたびに送ってくださいます。今回いただいたのは『気象予報士のテラさんと、ぶち猫のテル』。「雨」や「風」「雪」「虹」など「お天気」をテーマにしたショートストーリーで、「レインボー銀座」の居酒屋「てるてる坊主」を舞台に次々と物語が巻き起こります。

「誰にも心の中に『雨が降る』ことがあります。辛いとき、哀しいとき、せつない時・・・本書で元気を出して心をパーッと青空にさせていただけたら」というのが先生の願いです。本当に心洗われる感動の一冊ですので、ぜひ読んでみてください。



## 編集後記

今回「はりきりご長寿列伝」で紹介させていただいた王滝村の三浦雪雄さんから先日、毛糸の帽子をいただきました。黒を基調に金や青色に光るキラキラ毛糸を使って作ってあり、とてもおしゃれでサイズもぴったり。今冬は、この帽子を愛用して寒さを吹き飛ばしたいと思います。94 歳のおじいちゃんの手作り帽子にあやかって、健康で長生きしたいものです。



編集・発行者： 大目 富美雄 (おおめ ふみお)

〒397-0301 長野県木曾郡木曾町開田高原末川 5190 番地

電話& FAX 0264-42-3661

携帯 090-2526-7156

E-mail info@ome-fumio.com